

オリゲネスの『祈りについて』にみられる「愛」(ἀγάπη)理解： 神への負債としての「愛」とその返済をめぐる論述に関する一考察

梶 原 直 美

The Study on Origen's Understanding of "Love" (ἀγάπη) in His Treatise 'On Prayer': On his statement about "Love" as debt to God and the repayment it

Naomi Kajihara

抄 録

オリゲネスは人間の主体的態度を重視する。しかし、彼の著作『祈りについて』においては愛を神への負債と位置付け、人間の主体性に拠らずむしろ強制的義務として理解し得る論述が見られる。その意味を、言語分析およびテキスト解釈によって考察した。その結果、そこには愛を強制的義務としてではなく人間の本来の態度とする彼の前提理解があり、それは、神と人間に関する関係理解に根拠づけられるものであることが明らかとなった。

キーワード：オリゲネス、祈り、愛 (ἀγάπη)、負債 (ὀφειλή)

(2003年9月11日 受理)

Abstract

Origen regards human self-direction as important. However, he seems to understand that love is debt to God and it is based on not human self-direction but forced obligation. This paper discusses the meaning through analysis of the words and interpretation of the texts. As a result, it is proved that Origen basically understands love as based on not forced obligation but human essential attitude, and it is grounded in his recognition of the relationship between God and a human.

Keywords : Origen, prayer, love (ἀγάπη), debt (ὀφειλή)

(Received September 11, 2003)

序

有賀鐵太郎は、オリゲネスに関して、「彼の『祈り』は同時に愛の行いであった¹⁾と評価している。オリゲネスにかぎらず、キリスト者にとって「愛する」という主体的態度は重要であると同時に、その困難さのゆえに、しばしばそれを求める祈りがなされる。

この愛に関連する事柄を、オリゲネスは『祈りについて』²⁾のなかで取り上げている。それは、たとえばマタイ5, 43等から、「神聖なる言葉によれば、諸徳能の中で主要な一つの[徳能]は身近な者に対する愛(ἀγάπη)です³⁾との説明に見られる。ここでは、彼が聖書を基準に愛を重視していることが伺える。

しかしながら、『祈りについて』全体のなかで、とくに「愛」ないしは「愛する」という事柄そのものに焦点を当て、それについて論じている箇所は見当たらない。ただ、主の祈りの「わたしたちの諸々の負い目をおゆるしてください」を注解するなかで、オリゲネスはローマ13, 7-8を引用し、愛することを「負い目」との意識をもって位置付けるとともに、われわれには「愛を保つべき負い目がある⁴⁾と述べている。ここでは、愛することは「負い目」として、また「義務」として、言及されている。つまり、『祈りについて』のなかの、愛することに関する数少ない記述に見出される内容は、「負い目」との関連において認識されているのである。愛することは、なぜ、負い目として、また義務的な事柄としてしか言及されていないのか。

この問いは、とくに、同じく主の祈りの試みに関する注解部において、「善が強制的なものとして、ある人にもたらされることを神は望まれず、自発的な[ものであることを望まれる]からです。』⁵⁾というオリゲネス自身の論述との対照において生じた。ここからは、愛するということが善であるなら、それは強制されてではなく、自発的な行為として理解されるべきと考えられるからである。

上記の、オリゲネスによるこの二箇所の論述はいかにとらえられるべきであるのか。つまり、オリゲネスは、愛の実践を、人間という主体にとって、いかなる姿勢でなすものと理解しているのか。何を根拠に愛する選択をなし、その選択のためにいかに祈り得るのか。

この発表においては、『祈りについて』の論述と、『諸原理について』およびオリゲネスによる聖書注解書等をもとに、愛に関する彼の理解の一側面を提示する。

1.

オリゲネスの愛理解に関して、たとえばC.オズボーンは、オリゲネスの愛理解をキリスト教的でなく新プラトン主義あるいはプロティノスの立場に接近しているとの評価に反論し、「フィロンスローピア」⁶⁾という用語に注目して、オリゲネスがこの用語をギリシャ哲学の伝統において理解したのではなく、キリストの受肉と啓示を表現したと主張し、それがキリスト教教理に基づくものであったと結論付けた。⁷⁾彼女のこの研究は、「愛」という事柄に関して、オリゲネスがギリシャ哲学の歴史の枠内に留まることなく、キリスト教に基づいて理解していたということを明示した点で評価される。ただし、愛に関する人

間の主体的選択の可能性に関して示唆を与えるものではない。

中村はオリゲネスの愛理解に関して、オズボーンが着目したフィランソロピアに関して、それを、初代教会からの伝承に基づく愛を表現しているものと理解するとともに、アガペーとエロースとの関連のなかでとらえている。そして、フィランソロピアを、エネルギーであるアガペーとエロースに正しい方向性、つまり神への志向を与えるものであると考え、キリストの下降によって示され支えられるものと結論づけている。⁸ この研究は、上に挙げた用語の使用をその文脈において分析し提示されたものであり、評価されねばならないであろう。ただ、この分類およびその適用は、『祈りについて』において、例外なく該当するわけではない。

オリゲネスは聖なる者の祈りの態度について説明する箇所で、「彼は捧ることを好む(φιλέω) だけではなく、愛し(ἀγαπάω)、諸会堂でなく諸教会で、『町かど』ではなく、『狭く、真直ぐな道』の真直ぐな場で、人々に見られようとしてではなく、『主なる神のみ前に』現れるように[捧るからです]」⁹ と述べている。ここでは、愛するということが、単に好むということに留まらないものとして理解されていることが考えられる。

小高は、ここで、「好む」と「愛する」という用語が意図的に使い分けられていることを指摘し、前者は自然的な傾向で自己的な感情を、後者は神に専心し狭き道を通して神を求め者の心情を示すものと理解している。¹⁰ 言い換えという文脈から、両者が区別されていることは明らかであり、小高のこの指摘は適切であろう。

このうちフィリアは、小高の指摘どおり、換言すれば、欲求を表現するものとして用いられていると言える。¹¹ そしてそれは、人のみを主体として、神、人、および好ましくないものも含めた何らかの行為に対して向けられている。アガペーは神から人へ、人から神あるいは人または事柄へ、という関係において使用されているが、この語もまた、人を主体とするとき、フィリア同様、適切でないものに対しても使用されている。¹² この場合、先の小高の指摘は当て嵌まらない。

ここから言えることは、アガペーとフィリアに関して、いずれも人間を主体とした場合には快樂を対象とし得る点では差異なく用いられており、必ずしも常に対象を区別する意図があったわけではないということである。¹³ しかし、アガペーとフィリアに意図的な言い換えがなされており、アガペーはフィリアよりも深みのある意味においてとらえられているのは確かである。¹⁴ また、フィランソロピアに関しては、その字義どおりに、人間に対して向けられる愛として区別されるが、ここではとくに、中村の指摘するような、愛に適切な方向性を与えるものとして理解されているわけではない。

オリゲネスの場合、聖書からの引用語は殆どそのまま聖書に従って選択して使用している。オリゲネスが『祈りについて』において読者に語るなかで、愛することに関連する内容を論じるさいには「アガペー」のみが用いられており、それもまた聖書の引用を伴うものである。しかしこのアガペー自体を、前述のように、フィリアよりも深い意味においてとらえている。では、そのような内容はいかに理解されていたのか。

2.

『祈りについて』のなかで順番に注解されている主の祈りは、その28章において「わたしたちの諸々の負い目¹⁵をおゆるしてください」という一節に言及され、そこにおいてローマ13, 7-8が引用されている。

「互いに愛し合うことのほかに、誰に対してもどんな負い目があってはなりません。」¹⁶

この8節における「負い目」は7節における「義務」¹⁷と同語である。¹⁸内容的に、8節は7節と同様に法的義務としての「負い目」を意味するが、パウロは愛をこの法的義務を超えるところに理解していることが、聖書学の立場から指摘される。¹⁹つまり、法的義務としての負い目は消却可能なものとして、愛の負い目は償いきれない無限の負債として理解されているのである。

人間はいかに懸命に愛しても、それが真剣であればあるほど不充足さを自覚し、しかし同時になお積極的に愛することに留まる。その意味において、人間は本性的に、愛することに関して常に負債を抱える存在である。

オリゲネスは彼の『ローマの信徒への手紙注解』において、該当箇所而言及するさい、罪を負い目とみなして強調し、以下のように述べている。

「ですから、罪の負い目がことごとく解かれ、私どもにはいかなる罪の負い目も残っていないように、しかし愛の負い目は私どもからなくなることの決してないように、パウロは願っているのです。実に、この[愛の負い目]を毎日支払い、[愛の]負債を常に負いつづけることは、私どもにとって有益なことです。」²⁰

ここには、人間に関する、負い目を負う者という認識が見られる。人間はその負い目を、律法の遂行によって返済するか、あるいは「健全なロゴスを軽んじること」によって負い目のあるまま留まるものと理解されている。²¹上記箇所においては、愛の負債を負い続けることが有益であると述べられている。

これとは逆に、負債を完全に返却し得る人について述べられている箇所もある。²²この箇所に関しては、これ以降にテキストの欠損があり、確かな内容が明示されていないが、文脈から推測すると、完全な返却そのものを提示するのではなく、いかなる負債の返済にさえ、つまり、たとえそのような完璧な返済にさえも、負債者自身の地道で現実的な返済努力が必要であり、そしてそれは成果をあげるものであることを伝えようとするものであると考えられる。

以上をもって、各々が負い目を有するものであること、その返済は生活のなかで地道にな

されるべきものであること、また、負債を負うことおよび返済することそのものが各自にとってむしろ有益なことであることが提示されている。

3.

つぎに、負い目を持っていること、なかでも神の側からの人間に帰される負い目を自覚することの重要性が説かれる。ここに例外者は存在しない。

「人々を愛される、知恵の霊から、人々に果たすべくわたしたちに帰される、ある事どもをわたしたちがなおざりにするなら、借りは更に大きなものとなるでしょう。」²³

このなかで、「ある事ども」とは、他者に与えることを目的ないしは前提に、神の側から人間に与えられていることを指すのであり、もし与えられているそれをその用途にふさわしく用いないなら、負い目は増大する。神の側から与えられているものに対する責任というオリゲネスの意識が、ここに見られる。そして、神の造られたものという根拠を持ち出し、さらに以下のように言われている。

「以上のすべてに加えて、[わたしたちは] 何よりも神の造られたもの、[神の] 形造られたものでありますから、このおかたに対してある種の心構えを持ち、『心を尽くし、力を尽くし、思いを尽くし』での愛(アガペー)を[保つ]べき負い目があるのです。」²⁴

ここでは、人間が神の作品および形成物であるということが、人間を愛すべき主体とする根拠となっている。

この語の典拠であるエフェソの信徒への手紙のなかで、その2, 9までは、人間は行いによるのではなく、恵みにより、信仰により救われたことを言おうとするものであるが、2, 10²⁵において突然、人間が「善い業」という目的のために²⁶ 造られたものであると述べられる。

R.P.マーティンによると、聖書学の立場において、2, 10は、行いなしに神の恵みのみが強調されることによって弱体化した倫理的な意識の変革をねらい、実際の行動もまた重要なものであることを認識させるための論述であることが指摘される。²⁷ そして、2, 10の「わざ」は2, 9の「行い」とは異なるものとして、救いの根拠たる行為ではなく、キリスト者の新たな生の必然的帰結ないしは結果であると理解されている。

しかし実際にはいずれにも“ἐργον”という語が用いられ、この同じ語をオリゲネスがいかなる立場でとらえたのかをここで推測することはできない。ただ、オリゲネスは、先にも述べたように、神に存在を与えられた者として、神によって造られ形成された者とし

て自己を含む人間を意識していたことは確かであり、ここに、神に発し、神から与えられている愛に対して、愛をもって応える本来の在り方への確認と決断を見ることが出来る。

またローマ9, 20²⁸ に関して、オリゲネスは彼の注解書のなかで、神を陶工、人間を粘土に譬えて、神の人間に対する「権限」について言及し、その権限を侵す人間を神の意図に反する主体として、否定的にとらえている。²⁹ そしてさらに、テモテⅡ 2, 20-21を引用し、神はその権限によって、人間を、貴いことと卑しいことのいずれかに用いられる器にすると述べている。³⁰

ここで、人間に対して向けられている「用いる」という言葉は、存在の有無に関する事柄ではなく、存在の用途ないしは意味を指し示すものであり、何に、どのように用いられながら生きるのかという、つまりは人間の具体的な生き方に言及する語であるとも言える。

以上の二箇所からは、神の「権限」は決して人間の手中には掌握され得ず、人間自身に存在、用途ないしは意味を与えている根源的な主体は神だというオリゲネスの理解を指摘することができる。

4.

ここで、負い目を持つ人間の、その主体の在り方について注目したい。

マタイとルカにみられる主の祈りの内容の差異に関して、オリゲネスはその都度それについて説明している。³¹ ここも同様であるが、「負い目」という語に基づいて詳細に説明したあとで³²、ルカにおける「罪」という語に比較的簡単に言及している。³³ ここで人間にとって実際の課題となるのは負い目への対処であり、負い目の結果である罪のほうではない。オリゲネスが負債という事柄を説明するなかで、読者は、具体的にどうすればよいかということへの考察を促され、自分の抱える負い目への主体的な対応を喚起される。

さらに、ルカの言葉に言及するにあたって、オリゲネスの視点は「負債」や「罪」を離れ、「ゆるし」という事柄に向けられる。³⁴ 人間が人間に対してなされた罪をゆるすことは各々が所有する権能であるが³⁵、神に対してなされた罪をゆるす権能は、神しか持ち得ない。³⁶ ゆえに、もし神に対して罪を犯すなら、誰も彼のために禱り得ない。³⁷

オリゲネスによれば、他者の祈りによってもゆるされ得ない「『死に到る』罪」³⁸ は神に対する罪であり、そのような罪が発生するのは、神に対して負い目を持ちながらそれを返済しないときである。神に対する負い目というのは「心を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして」神を愛することである。³⁹

以上のように、オリゲネスにおいて、人間の、人間に対する在り方と、神に対する在り方とは区別されている。また、「互いに愛し合うことのほかに、だれに対してもどんな負い目があってはありません」⁴⁰ という言葉において勧められている愛の態度と、「心を尽くし、力を尽くし、思いを尽くし」⁴¹ て捧げよと勧められている愛の態度にも、意識の差

が推測される。⁴² つまり、前者は人間相互間における互いの態度であり、後者は神への人間の態度である。

ここで、オリゲネスが偉大な善の理拠の簡潔な要約であるとしてローマ13, 10を位置付けている注解の記事に目を向けたい。

「律法の掟の一つ一つに愛を添えてご覧なさい。そうすれば、すべての [掟] を全うするのがいかに容易なものか分かるでしょう」⁴³

「ですから、この身近な人を愛しているなら、私どもはすべての律法と掟全体とをこの方への愛の内に全うするのです。…つまり、心を尽くし、思いの限りを尽くしてキリストを愛する者が、キリストの喜ばれないことを何かするというようなことは、決してありえないのです。」⁴⁴

身近な者への愛について語るこの後者の内容は、『祈りについて』11, 2においても触れられ⁴⁵、さらには、29, 8の記事とも関連性を持ち⁴⁶、オリゲネス自身、この箇所をすでに述べた28, 3とも関連付けている。

神と人が構成する人格関係において、まず神への愛が問われ、それに従って人への愛が左右される。つまり、思いを尽くして神ないしはキリストを愛することは、身近な人を愛することへと繋がるが、神ないしはキリストを愛さないなら、もはや他者の祈りも効力を持たず、死に到る深刻な罪を犯すこととなるのである。

オリゲネスはしばしば、神の怒りや報復について述べることで、人間の実際の生き方を「善い」ものであるようにと忠告し、警告さえしている。しかし、彼の目的は脅迫的に善い行動に駆り立てることなのであろうか。

たとえば、彼は『ローマの信徒への手紙注解』のなかでIテモテ1, 9-10を引用し、以下のように述べている。

「実に、このような者らは、律法を恐れています。ところが、善を行う者、つまり律法への恐れによってでなく、善への愛によって善いことを行う者は、もはや文字の律法の下ではなく、霊の律法の下に生きているのです。」⁴⁷

ここには、行為先行の態度ではなく、何に基づいて行為に到るのが示されている。それはすなわち、自らを裁く権威への恐れではなく、善への愛によってである。

そして、善を行う者とは、結果として生じる善行によって量られているのではなく、「善への愛によって善いことを行う者」とされている。この論理に従うと、愛する者とは「愛への愛によって愛を実践する者」と言い換えることができよう。つまり、強制されてでも、恐れからでも、単に義務としてでもないということがわかる。

結

以上、『祈りについて』を中心に、とくにその28章に論じられていた愛に関する記述を検討した。これによって得られたオリゲネスの祈禱における愛理解をここでまとめるとともに、最終的な考察の結果を提示する。

まず、オリゲネスによって愛は「負い目」(ὀφειλή)と表現され、人間の抱える義務であると理解されていた。その主な理由は、人間が神の作品であるということに見出される。神の作品、神の形成物たる人間は、愛である神を愛するという負債を負う存在である。この神への負債の返済は、祈りも含めて他者の介入する余地はなく、ただ神に対する自らの選択によってなされる。しかもこの負債は、神の人間に対する無限の愛と、人間の不完全さゆえに、常に生じ続ける。

また、同様に神の作品である他者との間には相互関係が成立し、そのなかで互いに愛する負債を持つ。ゆえに、負債を返済し得るよう、愛することに努める義務を負っている。また、他者の返済を願って、愛するようとその人のために禱ることが可能であり⁴⁸、その禱りは禱られた他者のために有効である。

このような事柄をオリゲネスは重視し、これを根拠として主体的に愛することを強く勧め、それはしばしば他の著作、他の主題においてもその傾向が見られるように、強制的な義務や責任とも受け取ることのできるかたちで表現されている。しかしそれは人間から主体性を剥奪し、神の意図を強要しようとするのではなく、自らがその行為を願い、その行為を愛することによって選択していくことが目的とされている。

ただ、これらはすべて、不十分な人間の現実において目指されることであり、人間はその弱さゆえにしばしば愛することをしないばかりか、愛することを欲することさえもない。オリゲネスは、自己を含めてこのような人間の弱さを認識しており、それは彼の著作においてもしばしば目にするところである。

たとえば、オリゲネスは自己の力の弱さや不完全を懸念するとき、聖霊の助けを祈り求めている。彼は、人間が人間であるがゆえに有する限界を認識しつつ、その超克の可能性を自らのうちにではなく神に見出している。これが、オリゲネスを単に偉大な哲学者としてではなく、キリスト者と評する大きな根拠でもあろう。神に造られた人間として、神にある性質を自らに信じ、その与えられたものを、神に忠実に用いていく。オリゲネスの祈りは、彼のこのような理解に支えられ、現実のなかに捧げられた。

注

*本稿は、2003年9月13、14日に関西学院大学で開催された第54回キリスト教史学会における研究発表の原稿に修正、加筆したものである。

本稿において、オリゲネスの著作の表記には以下の略記を用いた。

『祈りについて』：PE 『ローマの信徒への手紙注解』：ComRom
 『諸原理について』：PA 『ヨハネによる福音注解』：ComJoh

- 1 有賀鐵太郎『オリゲネス研究』(有賀鐵太郎著集 I)、創文社 1981年(長崎書店1943年の再版)、107頁、参照。
- 2 本稿では、底本として、Koetschau, P., hrsg., “ΠΕΡΙ ΕΥΞΗΣ”, in: *Die griechischen christlichen Schriftsteller (GCS) Tomus III (Origenes Werke Tomus II)*, Leipzig 1899, pp. 297-403. を用い、引用には GCS と略記し、巻数、頁数および行数を順に記載している。なお、邦訳には、小高毅訳『オリゲネス 祈りについて・殉教の勧め』(キリスト教古典叢書12)、創文社 1985年、45-157頁、を参照し、本文中に引用する邦訳もこれに従った。
- 3 “μία δὲ κυριωτάτη τῶν ἀρετῶν κατὰ τὸν θεῖον λόγον ἐστὶν ἡ πρὸς τὸν πλησίον ἀγάπη” (PE 11, 2 [GCS 3, 322, 13-14].)
- 4 “ὀφειλομέν...ἀγάπην...” (PE 28, 3 [GCS 3, 376, 23].)
- 5 “οὐ γὰρ βούλεται ὁ θεὸς τιτὶ τὸ ἀγαθὸν ὡς κατὰ ἀνάγκην γενέσθαι ἀλλὰ ἐκουσίως...” (PE 29, 15 [GCS 3, 390, 23-391, 1].)
- 6 “φιλανθρωπία”.
- 7 Osborne, Catherine, “Neoplatonism and the Love of God in Origen”, in: *Origeniana Quinta*, 1992, pp. 270-283.
- 8 そこにおいて彼は、アガペーとエロースをそれぞれ神から一方的に与えられる愛および自己愛であるとするニーグレンに対して、『雅歌注解』におけるオリゲネス自身の言葉、「だから聖書がエロース (amor) といおうと、アガペー (caritas または dilectio) と言おうと、相違はないのである。」をもとに、両者はオリゲネスによって区別されていなかったこと、また、両者が善悪に関係なく何かに向かうエネルギーであると述べている。中村康英『オリゲネスにおける『愛』についての考察』『アイコン』第20号、新世社出版 1999年、115-133頁、参照。
- 9 “οὐ φιλεῖ γὰρ ‘προσευέσθαι’ ἀλλὰ ἀγαπᾶ, καὶ οὐκ ‘ἐν συναγωγαῖς’ ἀλλ’ ἐν ἐκκλησίαις, καὶ οὐκ ‘ἐν γωνίαις πλατειῶν’ ἀλλ’ ἐν τῇ εὐθύτητι τῆς στενῆς καὶ τεθλιμμένης ὁδοῦ, ἀλλὰ καὶ οὐχ ἵνα φανῇ ‘τοῖς ἀνθρώποις’ ἀλλ’ ἵν’ ὀφθῇ ἐνώπιον κυρίου τοῦ θεοῦ.” (PE 20, 1 [GCS 3, 344, 2-6].)
- 10 オリゲネス著、小高毅訳『祈りについて・殉教の勧め』、創文社 1985年、訳注62、参照。
- 11 Cf. Lampe, G. W., *A Patristic Greek Lexicon*, Oxford 1861, 1987⁸, p. 14781.
- 12 「…快樂を求めて生を送る人は皆、広々とした[道]を愛し、…」(PE 19, 3 [GCS 3, 343, 9-10]; “πάς γὰρ ὁ κατὰ τὴν ἡδονὴν βίονς, τὸ εὐρύχωρον ἀγαπήσας”) とあるように、アガペーは望ましくない対象としての快樂を愛することも、アガペーによって表現されている。なお、この前の箇所にも、Π τεμοτεの「神よりも快樂を愛し」(“φιλήδονοι μᾶλλον ἢ φιλόθεοι”) が引用されているが、その句においてアガペーが使用されているわけではない。ゆえに、オリゲネスはここで「愛する」という語に対して、聖書に拠らず、「アガペー」を選択していると考えられる。
- 13 そもそも当時のギリシャ世界において、これらアガペーとエロースおよびフィリアは、それほど厳密な区別のうちに認識されていたのではなかったと考えられる。Cf. Lampe, G.W., *ibid.*
- 14 エロースに関しては、使用が皆無であるということと、このアガペーおよびフィリアの使用回数と比較すると、オリゲネスがエロースを意図的に使用しなかったと考えるほうが自然であろう。
- 15 ルカによる福音書では「罪」となっている。
- 16 “μηδενὶ μηδὲν ὀφείλετε εἰ μὴ τὸ ἀλλήλους ἀγαπᾶν.” (PE 28, 1 [GCS 3, 375, 26].) Cf. Rom 13, 8.
- 17 Cf. 「すべての人々に対して自分の義務を果たしなさい。…」(Rom 13, 7: “ἀπόδοτε πᾶσιν τὰς

ὀφειλάς,...”)

- 18 7節では国家や役人に対して負っている負債を払うべきことを教え、8節では人間が互いに負っているすべての負い目へと議論が展開されている。
- 19 たとえば、山内真ら。
- 20 ComRom IX, 30。
- 21 PE 28において、オリゲネスはたびたびそのことに言及している。
- 22 PE 28, 5 (GCS 3, 377, 9-378, 17)。
- 23 “οὕτως δὲ, εἰ καὶ ἀνθρώποις ἀπὸ τοῦ φιλιανθρώπου τῆς σοφίας πνεύματος ἐπιβαλλόντων τινῶν ἀφ’ ἡμῶν ἐλλείπομεν, πλείον γίνεται ἡ ὀφειλή.” (PE 28, 2 [GCS 3, 376, 14-16].)
- 24 “καὶ ἐπὶ τούτοις πάσι τὸ ὑπὲρ πάντα ‘ποίημα’ καὶ πλάσμα ὄντες τοῦ θεοῦ ὀφειλομέν τινα διάθεσιν σώζειν πρὸς αὐτὸν καὶ ἀγάπην τὴν ‘ἐξ ὅλης καρδίας’ ‘καὶ ἐξ ὅλης ἰσχύος’ ‘καὶ ἐξ ὅλης διανοίας’.” (PE 28, 3 [GCS 3, 376, 2-4].)
- 25 オリゲネスによるエフェソ書注解は断片的に存在するのみで、2, 6のあと2, 12に飛び、この間の箇所には言及されていないために、その具体的内容を検証することはできない。
- 26 ここでは、「ἐπὶ ἔργους ἀγαθοῖς」と、与格において使用されている。
- 27 R.P.マーティン著、太田修司訳『現代聖書注解 エフェソの信徒への手紙、コロサイの信徒への手紙 フィレモンへの手紙』、日本基督教団出版局 1995年 (R. P. Martin, *Ephesians, Colossians, and Philemon Interpretation A Bible Commentary for Teaching and Preaching*, Westminster 1991.)、60-63頁、参照。
- 28 「人よ、神に口ごたえするとは、あなたは何者か。造られた者が造った者に、「どうしてわたしをこのように造ったのか」と言えるでしょうか」(“ὦ ἄνθρωπε, μενοῦνγε σὺ τίς εἶ ὁ ἀνταποκρινόμενος τῷ θεῷ; μὴ ἐρεῖ τὸ πλάσμα τῷ πλάσαντι· τί με ἐποίησας οὕτως;”: Rom 9, 20)
- 29 Cf. ComRom VII, 17. たとえば、オリゲネスはこれを「強情な僕」「無精な僕」、あるいは「傲慢」といった言葉で形容している。(この翻訳は、オリゲネス著、小高毅訳『ローマの信徒への手紙注解』、創文社 1990年、492-496頁、参照。)
- 30 その区別は「清め」られているかどうかであり、旧約聖書の例から、自分を清めた者は貴いことに、そうでないものは卑しいことに用いられたと説明している。また、もう少し具体的には、「彼の魂が自分を清めた」ことに根拠付けられている。これは、「魂の清さと純粋さ」とも換言されており、純粋さは「家に住んでいた」(Gen25, 27) ヤコブに見出されている。オリゲネスはパウロの言葉から、「清さ」以外に、罪の汚れを拭い去る「悔い改め」が必要であり、悪意が増長し、精神が「頑な」になることによってそれは軽んじられると説明している。
- 31 オリゲネスは主の祈りに関して、マタイによるもの「特別にそれを教えようとして語られた言葉」、ルカによるもの「弟子の懇願に応じて告げられた言葉」と理解し、それぞれ別のものであるとみなしている。(PE 18, 3 [GCS 3, 340, 25-341, 11].)

主の祈りのこの箇所において、マタイは「負い目」という語のみを、ルカは「負い目」に加えて「罪」という語をも用いており、オリゲネスも両者からの引用に関しては正確にそれに従っている。たとえば、マタイのみに記載されている箇所「あなたの意思が行われますように。天におけるように地上でも」に関しては、それがルカにおいて欠けていることに言及したのち、マタイにおけるこの箇所の注解を行っている。(PE 26, 1 ff. [GCS 3, 359, 16 ff.]) また、パンを求める祈りにおいて認められる違い、「今日」(Mt) と「毎日」(Lk) の両者に関して、双方をもとに尊重し、説明している (PE 27, 1 [GCS 3, 363, 23-364, 2]; 27, 13 [GCS 3, 371, 27-373, 2])。また、「悪しき者からお救いください」がルカでは祈られていないこと (PE 29, 1 [GCS 3, 381, 32-382, 4].) に言及するとともに、そのルカの意図を「簡潔」に語るためであるとし、「恐らく、既に恩沢を施しておられた弟子たちに対しては、主はいとも簡潔な [言葉] を語られ、より明確な教えを必要としていた多くの人々に関しては、より明瞭な [言葉] を語られたようです。」(PE 30, 1 [GCS 3, 393, 7-9]; “τοῦ πονηροῦ.” καὶ εἰκός γε πρὸς μὲν τὸν μαθητὴν, ἅτε δὴ ὠφελήμενον, εἰρηκέναι τὸν κύριον τὸ ἐπιτομώτερον, πρὸς δὲ τοὺς πλείονας, δεομένους τρανοῦ ἔρας διδασκαλίας, τὸ σαφέστερον.”) と述べている。

- これらと同様、負い目と罪に関する記事においても、マタイとルカの差異の根拠について、それは語りかけられる対象の違いによるものであると理解されており、両者に質的な優劣が認識されているわけではない。
- 32 PE 28, 1-7 (GCS 3, 375, 20-379, 24).
- 33 ここでは、祈りの言葉がマタイの示す内容と同じであると主張し、その理由を、「わたしたちが負い目を負っているが返済しないとき、諸々の罪というのが成り立つ」(“ἐπεὶ τὰ ἀμαρτήματα ὀφειλόντων ἡμῶν καὶ μὴ ἀποδιδόντων συνίσταται”) ことに見出し、それ以上は論じていない。(Cf. PE 28, 8. [GCS 3, 379, 26-380, 1].)
- 34 オリゲネスは、ルカが「皆」と述べていることに関して、それが一般に、皆が許され得るものであると誤った解釈のもとに理解されていることを指摘する。つまりオリゲネスには、許され得ない人々の存在が意識されている。
- 35 オリゲネスによれば、人間は、他者が負っている自分自身への負債をゆるす権能を有している。他者が自分に対して罪を犯し、それが「繰り返しな」されるとしても、「ゆるさねばな」らない。「遺恨を抱かずに彼らに接し、友愛のこもった態度をと」ること、および「寛大」であることが求められている。ゆるすこともまた愛することの一面であると言えよう。
- 36 Cf. PE 28, 8-10 (GCS 3, 379, 25-381, 31).なお、実際に、自らへの負債を負う他者を「皆」ゆるす義務があるのか否かという内容に関しては曖昧さを残したままであり、このことから、それが少くともここにおけるオリゲネスの主張の中心ではなかったことが考えられる。
- 37 Cf. Sam I 2, 25.
- 38 “τῆς πρὸς θάνατον ἀμαρτίας” (PE 28, 10 [GCS 3, 381, 16]). Cf. John I 5, 16.
- 39 つまり、そのように神を愛さない場合、誰にも執り成し得ない死に到る罪が発生する。たとえば、「これらのことを正しく行わなければ、主に対して罪ある者として、わたしたちは神に負い目のあるものとして留まるのです。このような [場合]、だれがわたしたちのために祈ってくれるでしょう。」(PE 28, 3 [GCS 3, 376, 25-376, 26]; “ἅτινα ἐὰν μὴ κατορθώσωμεν, ὀφειλέται μένομεν θεοῦ, ἀμαρτάνοντες εἰς κύριον. καὶ τίς ἐπὶ τούτοις εὐξεται περὶ ἡμῶν;”
- 40 注14, 参照。
- 41 “ἐξ ὅλης καρδίας” καὶ ἐξ ὅλης ἰσχύος” καὶ ἐξ ὅλης διανοίας...” (PE 28, 3 [GCS 3, 376, 24].) Cf. Mk 12, 30.
- 42 両者において愛を表すには、いずれも聖書にしたがって、アガペーという語が用いられている。
- 43 ComRom IX, 30.
- 44 Ibid.
- 45 「諸徳能の中で主要な一つの [徳能] は身近な者に対する愛 (アガペー) です。」(PE 11, 2 [GCS 3, 322, 13-14]; “μία δὲ κυριωτάτη τῶν ἀρετῶν κατὰ τὸν θεῖον λόγον ἐστὶν ἢ πρὸς τὸν πλησίον ἀγάπη.”)]
- 46 「人々の間で最も優れた愛」(PE 29, 8 [GCS 3, 385, 13-14]; “τὸ δὲ κάλλιστον τῶν ἐν ἀνθρώποις, τὴν ἀγάπην....”)
- 47 ComRom IX, 28.
- 48 Cf. Sam I 2, 25.